

【梁紀十六】 強圉單閼，一年。

■梁、●西魏、**東魏**東魏、続国訳漢文大成 經子史部 第 9 卷 193p

高祖武皇帝十六太清元年（丁卯，547年）

【高歡の死と侯景討伐決断】

■春，正月朔（1日），日に之を食する有り，盡きざること鉤の如し。

■「蕭續は臨終に、帝に富を隠さず」 壬寅（38-35+1=4日），荊州刺史の廬陵威王の續は卒す。湘東王の繹を以て都督荊、雍等九州諸軍事、荊州刺史と為す。續は素より貪婪にして，臨終に，啟有り、中錄事參軍の謝宣融を遣わして金銀器千餘件を獻じ，上は方に其の富を知り，因りて宣融に問いて曰く、
「王之金は此に盡きる乎？」

宣融は曰く、

「此を之れ多しと謂う，安んぞ加う可けん也！大王之過ちは日月之食の如し，陛下をして之を知ら令めんと欲す，故に終わり而して隠さず。」

上の意は乃ち解く。

■「湘東王の繹は蕭續の死に小躍り」 初め，湘東王の繹は荊州刺史と為り，微過有り，續は之に代わり，
狀を以て聞し，此より二王は書問を通じず。繹は其の死を聞き，閤に入り而して躍り，屣（^{しょう}履き物）は之が為に破る。（9-194p）

東魏 「高歡死す、高澄は秘す」 丙午（42-35+1=8日），東魏の勃海の獻武王の歡は卒す（年52）。歡の性は深密，終日儼然とし，人は測る能わず，機權之際，變化は神の若し。軍旅を制馭するに，法令嚴肅なり。聽斷明察にして，欺犯する可からず。人を擢んでて任を受（授）けるに，才を得るに在り，苟くも其の堪える所は，廝養（雑用をする召使）を問う無し。虚聲有りて實無き者は，皆な任用せず。雅より儉素を尚び，刀劍鞍勒は金玉之飾り無し。少きとき能く劇飲するも，大任に当たりてより，三爵に過ぎず。人を知り士を好み，勳舊（尉景・司馬子如・孫騰など）を全護す。敵國の節を盡くす之臣（泉企・裴讓之）を獲る毎に，多く之を罪せず。是に由りて文武は之が用を為すを楽しむ。世子の澄は秘して喪を發せず，唯だ行台左丞の陳元康のみは之を知る。

東魏 ● 「侯景は叛して魏に帰す」 侯景は自ら念うに、已は高氏と隙有り，内に自ら安んぜず。辛亥（47-35+1=13日），河南に據りて叛し，魏に歸し，潁州刺史の司馬世雲は城を以て之に應ず。景は豫州刺史の高元成、襄州刺史の李密、廣州刺史の懷朔の暴顯等を誘い執る。軍士二百人を遣わして仗を載せ，暮に西兗州に入り，襲いて之を取らんと欲す。刺史の邢子才は之を覺り，掩捕し，盡く之を獲る。因りて檄を東方の諸州に散じ，各々之が備えを為さしむ，是に由りて景は取る能わず。

東魏 「高澄は陳元康の諫めにより、侯景討伐を決断」 諸將は皆な以えらく、景之叛するは崔暹（權貴を糾弾し諸將は之を恨む）に由ると為す，澄は已むを得ず，暹を殺して以て景に謝せんと欲す。陳元康は諫めて曰く、
「今四海は未だ清からずと雖も，綱紀は已に定まる。若し數將が外に在るを以て，苟くも其の心を悦ばしめ，無辜を枉殺し，刑典を虧廢すれば，豈に直だに上は天神に負くのみならんや，何を以てか下は黎庶（人民・庶民）を安んぜんや！晁錯（16卷漢の景帝三年にあり）の前事，願わくは公は之を慎しむべし。」

澄は乃ち止む，司空の韓軌を遣わして諸軍を督して景を討たしむ。

■辛酉（57-35+1=2 3 日）、上は南郊を祀り、大赦す。甲子（60-35+1=2 6 日）、明堂を祀る。

●二月、魏は詔す、

「今より宮刑に應じる者は、直に官に没するのみ、刑する勿かれ。」

●魏は開府儀同三司の若於惠を以て司空と為し、侯景を太傅、河南大行台、上谷公と為す。

■庚辰（16-4+1=1 3 日）、景は又た其の行台郎中の丁和を遣わして（梁に）來たり、上表して言う、

「臣は高澄と隙有り、請う函谷以東、瑕丘以西、豫、廣、潁、荊、襄、兗、南兗、濟、東豫、洛、陽、北荊（武定二年に北荊州を置く、伊陽・新城・汝北郡を領す。河南省河洛道嵩県の東北 30 里、現・洛陽市嵩県）、北揚（東魏が北揚州・丹陽郡・秣陵郡を置く、河南省開封道項城県、現・周口市項城市）等十三州を擧げて内附せん、惟だ青、徐の數州は、僅に折簡を須たん。且つ黄河以南は、皆な臣の職する所、易きこと掌を反すに同じ。若し齊（青州）、宋（徐州）一たび平らげば、徐ろに燕、趙（河北の地）を事とせん。」

上は群臣を召して廷議す。尚書僕射の謝舉等は皆な曰く、

「頃歲魏（東魏）と通和し、邊境は無事なり、今其の叛臣を納れれば、竊に謂うに宜に非ず。」

上は曰く、

「然りと雖も、景を得れば則ち塞北は清む可からん。機會は得難し、（9-195p）豈に宜しく膠柱（柱に膠して瑟を鼓するが如く、圓轉する能わず、にかわ）すべけんや！」

【梁は侯景を受入れ】

■「蕭衍は苦慮の末、侯景の投降を納れる」是の歲、正月、乙卯（51-35+1=1 7 日）、上は夢みて中原の牧守が皆な其の（続により補充）地を以て來降し、朝を擧げて慶を稱すを。且だ、中書舍人の朱異を見、之を告げ、且つ曰く、

「吾の人と為りは夢少なし、若し夢有れば、必ず實なり。」

異は曰く、

「此れ乃ち宇内混壹之兆也。」（これは天下統一の兆しなり）

丁和至るに及び、

「景が計を定めるは、正月乙卯を以てせり」

と稱し、上は愈々之を神とする。然るに意は猶ほ未だ決せず、嘗て獨り言う、

「我が國家は金甌の如し、一に傷缺無し、今忽ち景の地を受けるは、詎ぞ是れ事宜ならん？脱し紛紜を致せば、之を悔いとも何ぞ及ばん？」

朱異は上の意を揣知し、對えて曰く、

「聖明の御宇、南北歸仰す、正に事に機會無きを以て、未だ其の心を達せず。今侯景は魏土之半を分けて以て來たり、天は其の衷（中心）を誘い、人は其の謀を讚するに非ざるよりは、何を以てか此に至らん！若し拒み而して内れざれば、恐らくは後來之望みを絶たん。此れ誠に見易し、願わくは陛下は疑う無し。」

上は乃ち議を定めて景を納れる。壬午（18-4+1=1 5 日）、景を以て大將軍と為し、河南王に封じ、河南北諸軍事を都督せしめ、大行台とし、製を承けること鄧禹の故事の如し。平西咨議參軍の周弘正は、占候を善くし、此より前人に謂って曰く、

「國家は數年後に當に兵起こる有らん。」

景を納れるを聞くに及び、曰く、

「亂階は此に在り矣！」

■丁亥（23-4+1=20日），上は藉田を耕す。

■「蕭衍はまた捨身す」三月，庚子（36-34+1=3日），上は同泰寺に幸し，捨身すること大通（最初の捨身、151巻にあり）の故事の如し。

■「梁は侯景を出迎える」甲辰（40-34+1=7日），司州刺史の羊鴉仁を遣わして兗州刺史の桓和、仁州（梁が赤坎城に置く、臨淮郡を帯び、己吾・義城県を領す。安徽省淮泗道靈璧県東南、現・宿州市靈璧県）刺史の湛海珍等を督して、兵三萬を將いて懸瓠に趣き、糧食を運びて侯景に應接せしむ。

●魏は大赦す。

東魏 「高澄は鄴に入朝し、基盤を固める」 東魏の高澄は諸州の變有るを慮り、乃ち自ら出でて巡撫する。段韶を留めて晉陽を守らしめ、委ねるに軍事を以てす。丞相の功曹の趙彥深を以て大行台都官郎中と為す。陳元康をして豫め丞相の歡の條教數十紙を作らせめ、韶及び彥深に付し、後に在りて次を以て之を行わしむ。發するに臨み、彥深の手を握り泣いて曰く、

「母、弟を以て相い托し、幸いに此の心を明らかにすべし！」

夏，四月，壬申（8-3+1=6日），澄は鄴に入朝し。東魏主は之と宴し，澄は起ちて舞い，識者は其の終らざらんを知る。

■「皇帝の捨身を贖う、天下も皇帝も忘れる」 丙子（12-3+1=10日），群臣は奉贖す（群臣が捨身した帝を贖う、37日。帝は天下を忘れ、天下も君を忘れる）。丁亥（當に丁丑に作るべし、13-3+1=11日、丁亥では21日になり不自然），上は宮に還り，大赦し，改元す，大通の故事の如し。

■東魏 甲午（30-3+1=28日），東魏は兼散騎常侍の李系を遣わして來聘す。系は，繪（158巻大同八年にあり）之弟也。（9-196p）

東魏 五月，丁酉（33-33+1=1日）朔，東魏は大赦す。

【侯景の策謀で三つ巴の混乱】

東魏 ■ 「東魏は侯景を襲撃」 戊戌（34-33+1=2日），東魏は襄城王の旭を以て太尉と為す。高澄は武衛將軍の元柱等を遣わして數萬の衆を將いて晝夜兼行して以て侯景を襲い，景に潁川北に遇い，柱等は大敗す。景は羊鴉仁等の軍が猶ほ未だ至らざるを以て，乃ち退きて潁川を保つ。（侯景は高歡死すとも高澄健在で北に帰れず）

東魏 ■ 「高澄の政治体制刷新」 甲辰（40-33+1=8日），東魏は開府儀同三司の庫狄干を以て太師と為し，錄尚書事の孫騰を太傅と為し，汾州刺史の賀拔仁を太保と為し，司徒の高隆之をして尚書事を錄さしめ，司空の韓軌を司徒と為し，青州刺史の尉景を大司馬と為し，領軍將軍の可朱渾道元を司空と為し，僕射の高洋を尚書令と為し，中書監を領せしめ，徐州刺史の慕容紹宗を尚書左僕射と為し，高陽王の斌（玉儀によりて適用される）を右僕射と為す。戊午（54-33+1=22日），尉景は卒す。

東魏 ■● 「侯景を巡る三つ巴の戦い」 韓軌等は侯景を潁川に圍む。景は懼き，東荊（東魏の東荊州北陽城に治し、荊州は魯陽に治す）、北兗州（東魏に無い州、北荊州は伊陽に治し、西魏に接する、史家は誤る）、魯陽、長社（潁州の治所）の四城を割きて魏に賂して以て救いを求める。尚書左僕射の於謹は曰く、

「景は少きより兵を習い、奸詐は測り難し、其の爵位を厚くし以て其の變を觀るに如かず、未だ兵を遣る可からざる也。」

荊州刺史の**王思政**（恒農より移りて刺史となる）は以為く、

「若し機に因りて進取せざれば、後悔は及ぶ無し。」

即ち荊州の歩騎萬餘を以て魯陽關より陽翟（漢の潁川に属す県、晋の河南尹、興和元年に陽翟郡を分置し、潁川に属す。河南省開封道禹県、現・許昌市禹州市）に向かう。丞相の**泰**は之を聞き、**景**に大將軍兼尚書令を加え、太尉の**李弼**、（開府）儀同三司の**趙貴**を遣わして兵一萬を將して潁川に赴かしむ。

■ **〔侯景の言い訳、武帝は信用す〕** **景**は上の之を責めるを恐れ、中兵參軍の**柳昕**（続による）を遣わして上に奉啟し、以為く、

「王旅（羊鴉仁らの援軍）は未だ接せず、死亡は交々急なり、遂に援を關中に求める、自ら目前を救う。臣は既に**高氏**に安んぜず、豈に**宇文**に容れられんや！但だ手を蟹（さそり）せば腕を解く、事は已むを得ず、本は圖りて國の為にす、願わくは咎めを賜わざらんことを！臣は其の力を獲たり、即ち棄てるべからず、今四州之地を以て敵に餌する之資と為し、已に**宇文**をして人を遣わして入り守ら令む。豫州より以東、齊海以西は、悉く臣が控壓す。見に有する之地は、盡く聖朝に歸せん、懸瓠、項城、徐州、南兗、事は須く迎納すべし。願わくは**陛下**は速に境上に敕し、各々重兵を置き、臣と影響（呼応）し、差互せ使めざらんことを！」

上は之に報じて曰く、

「大夫は境を出れば、尚ほ専らにする所有り（春秋の義、大夫は疆を出ずればこれを専らにするも可なり。上は此の義を引き、以て侯景を綏懐せんと欲す）。況んや始めて奇謀を創り、將に大業を建てんとす、理は須く事に適し而して行い、方に隨いて以て應ずべし。卿が誠心は本有り、何ぞ詞費（耗費言詞）を假らん！」（9-197p）

● 魏は開府儀同三司の**獨孤信**を以て大司馬と為す。

■ **六月**，戊辰（4-2+1=3日），鄱陽王の**范**を以て征北將軍と為し、漠北征討諸軍事を總督し、穰城を撃たしむ。（梁は侯景に応接するために攻撃）

東魏 ■ ● **〔三つ巴の駆け引き〕** 東魏の**韓軌**等は潁川を圍み、魏の**李弼**、**趙貴**等が將に至らんとするを聞き、己巳（5-2+1=4日）、兵を引いて鄴に還る。**侯景**は會に因りて**弼**と**貴**を執り、其の軍を奪わんと欲す。**貴**は之を疑い、往かず。**貴**は**景**を誘いて營に入り而して之を執らんと欲し、**弼**は之を止める（侯景を捕りても卒に河南の地を兼ねる能わずただ東魏の為に疾を去るのみ）。**羊鴉仁**は長史の**鄧鴻**を遣わして兵を將いて汝水に至り、**弼**は兵を引いて長安に還る。**王思政**は入りて潁川に據る。**景**は陽りて地を略すと稱し、軍を引いて出でて懸瓠に屯す。（侯景は城を出て魏に与える）

● **〔侯景は再び魏に救いを求める〕** **景**は復た兵を魏に乞い、丞相の**泰**は同軌（郡名、此处より兵を出して天下統一して、車軌を同じくすの意味。河南省河洛道宜陽県、現・洛陽市宜陽県）の防主の**韋法保**及び都督の**賀蘭願徳**等をして兵を將いて之を助け使む。大行台の左丞の藍田の**王悦**は**泰**に言つて曰く、

「**侯景**之**高歡**に於けるは、始めは郷黨之情（懷朔鎮の同僚、爾朱に事える）を敦くし、終に君臣之契り（爾朱打倒後に質を出して服従）を定め、任は上將に居り、位は台司に重し。今**歡**は始めて死に、**景**は遽に外に叛し、蓋し圖る所は甚大にして、終に人の下に為らざる故也。且つ彼は能く徳に**高氏**に背き、豈に肯えて節を朝廷に盡くさんや！今之を益すに勢いを以てし、之を援けるに兵を以てすれば、竊に恐る、笑いを將來に貽さん也。」（西魏には策謀の士多く、宇文泰は侯景の作に嵌らず、遂に禍は梁に移る）

泰は乃ち**景**を召して入朝せしむ。

● **〔魏軍は侯景の詐術を覚る〕** **景**は陰に魏に叛かんと謀り、事は未だ成らざるを計り、厚く**韋法保**等を撫

し、己が用を為さんと冀い、外には親密にして猜間無きを示す、諸軍の間を往來する毎に、侍従は至って少く、魏軍中の名將は、皆な身自ら造詣す。同軌の防長史の裴寬は法保に謂って曰く、

「侯景は狡詐なり、必ず肯えて關に入らず、款を公に托さんと欲するも、恐らくは未だ信ず可からず。若し兵を伏して之を斬れば、此れ亦た一時之功也。如し其の爾らざれば、即ち應に深く之が防を為すべし、其の誑誘を信じ、自ら後悔を貽すを得ず。」

法保は深く之を然りとし、敢えて景を圖らず、但だ自ら備えを為し而して已む。尋いで辭して鎮する所に還る。王思政も亦た其の詐りを覺り、密に賀蘭願德等を召して還り、諸軍を分佈し、景の七州、十二鎮に據らしむ。景は果たして辭して入朝せず、丞相の泰に書を遣りて曰く、

「吾は高澄と雁行するを恥ず、安んぞ能く肩を大弟に比せん！」

泰は乃ち行台郎中の趙士憲を遣わして悉く前後遣わす所の諸軍の景を援ける者を召す。景は遂に來降を決意す（梁に付くを決意）。魏將の任約は所部千餘人を以て景に降る。

● 王思政を都督河南諸軍事 泰は景に授ける所の使持節、太傅、大將軍、兼尚書令、河南大行台、都督河南諸軍事を以て回して王思政に授け、思政は並びて譲りて受けず。頻りに使いして敦く諭し、唯だ都督河南諸軍事を受ける。(9-198p)

東魏 高澄は晉陽で高歡の喪を發す 高澄は將に晉陽に如かんとし、弟の洋を以て京畿大都督と為し、鄴に留守せしめ、黃門侍郎の高德政をして之を佐け使む。德政は、顥（147 卷天監七年にあり）之子也。丁丑（13-2+1=1 2 日）、澄は晉陽に還り、始めて喪を發す。

● 秋，七月，魏の長樂武烈公の若於惠（司空）は卒す。

東魏 高澄は実権把握 丁酉（33-32+1-2 日）、東魏主は丞相の歡の為に哀を擧げ、緦縗（喪服）を服し、凶禮（喪禮）は漢の霍光の故事に依り、相國、齊王を贈り、九錫殊禮を備える。戊戌（34-32+1=3 日）、高澄を以て使持節、大丞相、都督中外諸軍、錄尚書事、大行台、勃海王と為す。澄は啟して爵位を辭す。壬寅（38-32+1=7 日）、太原公の洋に詔して軍國を攝理せしめ、中使を遣わして敦く澄に諭さしむ。

■ 梁の守備体制 庚申（56-32+1=2 5 日）、羊鴛仁は懸瓠城に入る。甲子（60-32+1-2 9 日）、詔して更めて懸瓠を以て豫州と為し、壽春を南豫州と為し、合肥を改めて合州と為す。鴛仁を以て司、豫二州刺史と為し、縣瓠に鎮せしむ。西陽太守の羊思達を殷州（東魏の北揚州を改める）刺史と為し、項城に鎮せしむ。

■ 朱異は蕭會理を退け蕭淵明と組む 八月，乙丑（1-1+1=1 日）、下詔して大舉して東魏を伐たしむ。南豫州刺史の貞陽侯の淵明、南兗州刺史の南康王の會理を遣わして分けて諸將を督さしむ。淵明は、懿之子。會理は、績之子也。始め、上は鄱陽王の范を以て元帥と為さんと欲す。朱異は急（休暇）を取りて外に在り、之を聞き、遽に入りて曰く、

「鄱陽は雄豪世を蓋い、人の死力を得、然るに至る所殘暴し、民を弔う之材に非ず。且つ陛下は昔北顧亭に登り（京口に行幸す）以て望み、江右（豫州・南豫州・南兗州）に反氣有り、骨肉は戎首と為ると謂う。今日之事は、尤も宜しく詳擇すべし。」

上は默然たり、曰く、

「會理は何如？」

對えて曰く、

「陛下は之を得たり矣。」

會理は懦に而して謀無し、乗る所の欂輿（輿欄に欂を施し、人が肩を持って之を挙げる）に、板屋を施し、冠するに

牛皮を以てす。上は聞き、悦ばず。貞陽侯の**淵明**は時に壽陽に鎮し、屢々行くを請い、上は之を許す。**會理**は自ら皇孫にして、復た都督と為るを以て、**淵明**より已下、殆んど對接せず。**淵明**は諸將と密に**朱異**に告げ、**會理**を追いて還らしめ、遂に**淵明**を以て都督と為す。

東魏 辛未（7-1+1=7日）、**高澄**は鄴に入朝し、大丞相を固辭す。詔して大將軍為るは故の如し、餘は前命の如し。

■ **「墓発き」** 甲申（20-1+1=20日）、齊の獻武王を漳水之西に虚葬す。潜に成安（直隸省大名道成安県、現・邯鄲市成安県）の鼓山の石窟佛寺（頂×）之旁を鑿ちて穴を為り、其の柩を納め而して之を塞ぎ、其の群匠を殺す。齊之亡びるに及びる也、一匠之子は之を知り、石を發きて金を取り而して逃げる。

■ **東魏** 戊子（24-1+1=24日）、武州（五代志に、下邳郡下邳県は、梁は帰政と曰い武州を置く。江蘇省徐海道邳県、現・徐州市邳州市）刺史の**蕭弄璋**は東魏の**磧泉**、**呂梁**（江蘇省徐海道銅山県東南、現・徐州市銅山区）の二戍を攻め、之を抜く。（9-199p）

東魏 **「侯景家族の生殺与奪」** 或は東魏大將軍の**澄**に告げて云わく、

「**侯景**は北に歸る之志有り。」

會々**景**の將の**蔡道遵**は北に歸り、言う、

「**景**は頗る過ちを悔いるを知る」。

景の母及び妻子は皆な鄴に在り、**澄**は乃ち書を以て之を諭し、語るに闔門の恙無きを以てし、若し還れば、豫州刺史を以て其の身を終わらしめんを許し、其の寵妻、愛子、所部の文武を還し、更に追攝（攝は收）せざらん。**景**は**王偉**をして復書せ使めて曰く、

「今已に二邦（梁・西魏）を引き、旌を揚げて北討し、熊豹齊しく奮い、中原を克復せん、幸いにも自ら之を取らん、何ぞ恩賜を勞せんや！昔**王陵**（事は九卷漢の高帝元年にあり）は漢に付き、母は在りて歸らず、**太上**（事は十卷高帝四年にあり）は楚に囚われ、羹を乞いて自若たり、矧んや伊れ妻子にして、而も意に介す可けんや！脱し之を誅して益有ると謂えば、止めんと欲すとも能わず、之を殺すとも損無し、徒らに復た坑戮せん、家累（妻子の命）は君に在り、何ぞ僕に關せん也！」

■ 戊子（24-1+1=24日）、詔して**景**を以て行台尚書事を録さしむ。

東魏 **「靜帝の人となり」** 東魏の**靜帝**は、容儀美しく、旅力（膂力）は人に過ぎ、能く**石師子**を挟みて宮牆を逾え、射れば中たらざる無し。文學を好み、從容として沉雅なり。時の人は以為らく**孝文**の風烈有りと、大將軍の**澄**は深く之を忌む。

東魏 **「高歡は靜帝に事えること恭し」** 始め、**獻武王**（高歡）は自ら君を逐う（孝武帝を關中に追う）の之丑（続は醜）を病み、**靜帝**に事え禮は甚だ恭々しく、事は大小と無く必ず以て聞し、可否旨を聽く。宴に侍する毎に、俯伏して壽を上る。帝は法會を設け、輦に乗りて香を行うや、**歡**は香爐を執りて歩して従い、鞠躬（身をかがめ慎みかしこまる）として氣を屏け、顔色を承望し、故に其の下は帝を奉じること敢えて恭々しからざるは莫し。

東魏 **「高澄は靜帝を毆打させる」** **澄**の國に當たるに及び、倨慢（にわか）頗る甚だしく、中書黃門郎（黃門侍郎は門下省に屬し、中書侍郎は中書省に屬す）の**崔季舒**をして帝の動靜を察せ使め、小大は皆な**季舒**をして之を知ら令む。

澄は**季舒**に書を與えて曰く、

「癡人（靜帝）は比復た何に似たり？癡勢小しく差（瘡）ゆるに未だしや？宜しく心を用いて檢校すべし。」帝は嘗て鄴東に獵し、馳逐すること飛ぶが如し、監衛都督（宿衛の監督官を高氏は置く）の**烏那羅受工伐**は後に

従いて呼びて曰く、

「天子は馬を走らす勿かれ、大將軍は^{いか}嗔る！」

澄は嘗て飲酒に侍し、大觴（同僚の如くで、君臣の敬無し）を舉げ帝に屬して曰く、

「臣澄は陛下に酒を勧める。」

帝は忿りに勝えず、曰く、

「古より亡びざる之國無し、朕も亦た何ぞ此の生を用いるを為さん！」

澄は怒りて曰く、

「朕、朕、狗脚（馬を走らせた事を揶揄）の朕！」

崔季舒をして帝を毆た使むこと三拳、衣を奮い而して出でる。明くる日、澄は季舒をして入りて帝を勞ら使む。帝も亦た焉を謝す、季舒に絹百匹を賜わる。

東魏 高澄は靜帝を毆打・幽閉 帝は辱を憂うるに堪えず、謝靈運の詩（122 卷宋文帝元嘉十年にあり）を詠じて曰く、

「韓は亡びて子房（雌しべの子房室）は奮い、（9-200p）秦の帝たるは魯連（魯仲連、齊の荏平の出身の遊説家、BC305-BC245、秦王が「帝」となることの不利益を説く）は恥ず。本は自ら江海の人、忠義は君子を動かす。」

（散騎）常侍、侍講の潁川の荀濟は帝の意を知り、乃ち祠部郎中の元瑾、長秋卿の劉思逸、華山王の大器、淮南王の宣洪、濟北王の徽等と澄を誅さんと謀る。大器は、鷲（華山王鷲は大同六年に卒す）之子也。帝は謬りて敕を為り、濟に問いて曰く、

「何れの日を以て開講せんと欲するや？」

乃ち詐りて宮中に於いて土山を作り、地道を開いて北城に向かう。千秋門に至り、門者は地下の響きを覺り、以て澄に告げる。澄は兵を勒して宮に入り、帝を見、拜さず而して坐して、曰く、

「陛下は何の意にか反するや？臣父子の功は社稷を存せり、何ぞ陛下に負かん邪！此れ必ず左右の妃嬪輩の為す所ならん。」

胡夫人及び李嬪を殺さんと欲す。帝は正色して曰く、

「古より唯だ臣が君に反すを聞く、君が臣に反すを聞かず。王は自ら反せんと欲す、何ぞ乃ち我を責めるや！我は王を殺せば則ち社稷は安ず、殺さざれば則ち滅亡するに日無し、我が身すら且つ惜しむ暇あらず、況んや妃嬪に於いてをや！必ず弑逆せんと欲せば、緩速は王に在り！」

澄は乃ち床を下りて叩頭し、大いに啼きて謝罪す。是に於いて酣飲し、夜久しく乃ち出づ。居ること三日、帝を含章堂（坤卦の「含章は貞にす可し」の義を取る。必ず鄴宮の内殿の左右にあるべし）に幽（幽閉）す。壬辰（28-1+1=28日）、濟等を市に於いて烹す（釜ゆでの刑）。

■**東魏** 荀濟は梁から逃亡して東魏に入る 初め、濟は少きとき江東に居り、博學にして文を能くす。上と布衣之舊有り、上が大志有るを知り、然るに氣を負いて服せず、常に人に謂って曰く、

「會々盾鼻上に於いて墨を磨り之を檄せん。」

上は甚だ平らかならず。即位に及び、或は之を上を薦し、上は曰く、

「人は才有りと雖も、俗を亂し反を好む、用いる可からざる也。」

濟は上書して上の佛法を崇信し、塔寺を為りて奢費なるを諫め、上は大いに怒り、朝衆を集めて之を斬らんと欲す。朱異は密に之を告げ、濟は逃げて東魏に奔る。澄は中書監と為り、濟を用いて侍讀と為さんと欲し、獻武王は曰く、

「我は濟を愛し、之を全くせんと欲す、故に濟を用いず。濟が宮に入れば、必ず敗れん。」

澄は固く請い、乃ち之を許す。敗れるに及び、侍中の楊遵彦（楊愔の字）は之に謂って曰く、

「衰暮（年老いたるを言う）何ぞ苦しみて復た爾^{しか}る？」

濟は曰く、

「壯氣在る耳！」（年老いても氣力はある）

因りて辨（獄辭）を下して曰く、

「自ら年紀摧頽（摧折・衰敗）し、功名立たざるを傷み、故に天子を挾みて、權臣を誅せんと欲す。」

澄は其の死を宥さんと欲し、親ら之に問いて曰く、

「荀公は何の意か反するや？」

濟は曰く、

「詔を奉じて高澄を誅せんとするに、何ぞ反と謂わん！」

有司は濟の老病を以て、鹿車（小車で一鹿を入れる程度）をもて載せて東市に詣り、並せて之を焚く。

東魏 **「溫子升の死と宋游道の節義」** 澄は咨議（大將軍府の咨議參軍）の溫子升が瑾等の謀を知ると疑い、方に之をして獻武王の碑を作らせめ、既に成り、晉陽の獄に餓え、弊襦（破れた肌着）を食らい而して死す。（9-201p）屍を路隅に棄て、其の家口を没し（家族を没入して官の奴隸として晉陽宮に置く）、太尉の長史の宋游道は收めて之を葬す。澄は游道に謂って曰く、

「吾は近ごろ書して京師の諸貴に與え、論じて朝士に及び、以えらく卿が朋黨に僻し、將に一病を為さんとす。今乃ち卿が真に是れ故舊を重んじ、節義を尚ぶ之人なるを知り、天下の人の卿に代わりて怖れる者は、是れ吾が心を知らざる也。」

九月，辛丑（37-31+1=7日），澄は晉陽に還る。

■ **東魏** **「彭城の戦い」** 上は蕭淵明に命じて泗水を寒山に堰し以て彭城に灌^{そそ}ぎ、彭城を得るを俟ち、乃ち進軍して侯景と犄角せしむ。癸卯（39-31+1=9日），淵明は寒山に軍し、彭城を去ること十八里、流れを斷ちて堰を立てる。侍中の羊侃は堰を作るを監し、再び旬に而して成る。東魏の徐州刺史の太原王の則は城を嬰して固守し、侃は淵明に勧め、

「水に乗じて彭城を攻めるべし」

と、従わず。諸將は淵明と軍事を議し、淵明は對える能わず、但だ云う、

「時に臨みて宜しきを制せん」。

●冬，十一月，魏の丞相の泰は魏主に従いて岐陽（岐山の陽）に狩す。

東魏 ■ **「慕容紹宗登用と侯景の反応」** 東魏の大將軍の澄は大都督の高岳をして彭城を救わせめ、金門郡公の潘樂を以て副と為さんと欲す。陳元康は曰く、

「樂は機變に緩なり、慕容紹宗に如かず。且つ先王之命（前卷前年にあり）也。公は但だ赤心を斯の人に推せば、景は憂うるに足らざる也。」

時に紹宗は外に在り、澄は召して之を見んと欲し、其の驚き叛かんことを恐れる。元康は曰く、

「紹宗は元康の特に顧待を蒙ると知り、新たに（最近）人をして來たりて金を餉ら使む。元康は其の意を安んぜんと欲し、之を受け而して厚く其の書に答え、異無きを保す（紹宗が異を為す無きを保証する）也。」

乙酉（21-30+1=?、己酉なら 45-30+1=16日），紹宗を以て東南道行台と為し、岳、樂と偕に行かしむ。

初め、景は韓軌の來たるを聞き、曰く、

「啖猪腸兒（用無しの大飯食らい）は何ぞ能く為さん！」

高岳が來たるを聞き、曰く、

「兵に精しけれど人は凡なり。」

諸將は輕んずる所と為らざる者は無し。紹宗の來たると聞くに及び、鞍を叩いて懼れる色有り、曰く、

「誰か鮮卑兒に教えて紹宗を解遣（發遣する、人が物を發送するを解という）して來たらしむや！若し然れば、高王は定めて未だ死せざる邪？」

澄は廷尉卿の杜弼を以て軍司と為し、行台左丞を攝せしめ、發するに臨み、問うに政事之要を以てす、戒と為す可き者は、一二條を錄せ使む。弼は請いて口づから之を陳べて、曰く、

「天下の大務は、賞罰に過ぎる莫し。一人を賞して天下之人をして喜ばしめ、一人を罰して天下之人を懼れしめ、苟くも二事を失わざれば、自然に美を盡くさん。」

澄は大いに悦び、曰く、

「言は多からずと雖も、理に於いては甚だ要なり。」

東魏■**「慕容紹宗は梁軍に迫る」**紹宗は衆十萬を帥いて橐駝峴に據る。羊侃は貞陽侯の淵明に其の遠來なるに乗じて之を撃たんと勸め、從わず、旦日、又た出でて戦わんと勸め、亦た從わず。侃は乃ち所領を帥いて出でて堰上に屯す。（羊侃は淵明が必ず破れると思い、自軍を全くするために堰上に屯す）

東魏■**「蕭淵明を見限り、趙伯超は逃げ帰る」**丙午（42-30+1=13日）、紹宗は城下に至り、歩騎萬人を引いて潼州（梁が置く州、武定七年に譙州に改める、取慮城に治す。淮陽・穀陽・睢南・南濟陰・臨潼郡を領す、江蘇省徐海道睢寧県の西南、現・徐州市睢寧県）刺史の郭鳳の營を攻め、（9-202p）矢は下ること雨の如し。淵明は酔い、起つ能わず、諸將に命じて之を救わしむ、皆な敢えて出でず。北兗州刺史の胡貴孫は譙州（景明中に渦陽城に置く、南譙・汴・龍亢・蕲城・下蔡・臨渙・蒙郡を領す、渦陽城は安徽省淮泗道蒙城県、現・亳州市蒙城県）刺史の趙伯超に謂って曰く、

「吾が屬^{ともがら}は兵を將い而して來たるは、本は何を為さんと欲し、今敵に遇い而して戦わざる乎？」

伯超は對える能わず。貴孫は獨り麾下を帥いて東魏と戦い、斬首は二百級。伯超は衆數千を擁して敢えて救わず、其の下に謂って曰く、

「虜は盛んなること此くの如し、與に戦えば必ず敗れん、軍を全くして早く歸るに如かず、以て罪を免かる可し（続は無し）。」

皆な曰く、

「善し！」

遂に遁げ還る。

東魏■**「梁將は深追いして、東魏軍に大敗し擒となる」**初め、侯景は常に梁人を戒めて曰く、

「北^にげるを逐うこと二里を過ぎる勿かれ。」

紹宗は將に戦わんとし、梁人の輕悍なるを以て、其の衆の支える能わざるを恐れ、一一に將卒を引いて之に謂って曰く、

「我は當に陽^{いつわ}り退きて、吳兒（梁人）を誘（誤×）いて前ま使むべし、爾は其の背を撃て。」

東魏の兵は實に敗走し、梁人は景の言を用いず、勝ちに乗りて深く入る。魏の將卒は紹宗之言を以て信と為し、争いて共に之を掩撃し、梁兵は大敗し、貞陽侯の淵明及び胡貴孫、趙伯超等は皆な東魏の虜する所と為り、士卒の失亡するは數萬人。羊侃は陳を結びて徐に還る。

上は方に晝寢し、宦者の張僧胤は、

「朱異は事を啟す」

と白し、上は之に駭き（予定外の報告に驚く）、遽に起きて輿に乗り、文德殿閣（建康宮の前殿）に至る。異は曰く、

「寒山（続は韓山）は律を失う（戦敗）。」

上は之を聞き、恍然（続は怱）として將に床より墜ちんとす。僧胤は扶け而して坐に就かしめ、乃ち歎じて曰く、

「吾は復た晉家（夷狄の取る所となる）と為る無きを得ん乎！」

東魏■郭鳳は退きて潼州を保ち、慕容紹宗は進みて之を圍む。十二月，甲子（0-0+1=1日）朔，鳳は城を棄てて走る。

東魏■【東魏の杜弼の檄】東魏は軍司の杜弼をして檄を作りて梁朝に移して曰わ使む、

「皇家は統を垂れ、光に彼の天に配し、唯だ彼の吳、越、獨り聲教を阻む。元首（東魏主）は戈を止める之心を懷き、上宰（高歡）は兵車之命を薄め、遂に繋がる南冠（左傳に、楚は鄭を伐つ。鄭人は楚師に軍し鄭公鍾儀を囚え、諸々を晉に獻ず、晉人は諸々を軍府に囚う。晉侯は軍府を觀、鍾儀を見、問いて曰く、南寇して繋がる者は誰ぞやと。有司對えて曰く、鄭人の獻ずる所の楚囚なりと、命じてこれを税き、歸りて晉楚の成を合わせしむと）を解き、諭すに好睦（大同三年に梁は初めて東魏と通ず）を以てす。嘉謀（良い計）長算は、爰に我より始まると雖も、戦いを罷め民を息め、彼は其の利を獲る。侯景は豎子なり、自ら猜貳を生じ、遠く關、隴に托し、奸偽に依憑し、逆主（西魏主を指す）は君臣之分を定め、偽相（偽の宰相、宇文泰を指す）は兄弟之親を結び、豈に恩無しと曰わんや、終に養い難きと為す、俄に而して慮りを易え、親しく干戈を尋ねる。鬻暴に惡は盈ち、首を側てるに托無し（侯景が西魏に容れられない事）、金陵は逋逃之藪（侯景が梁に歸するの心迹をいう）、江南は流寓之地なるを以て、辭を甘くし禮を卑しくし、孰（熟すに通じる）を進めて身を圖り（軟熟の辭を梁に進めて以て身を容れるの画くを為す）、詭言浮説は、抑々知る可し矣。而るに偽朝の大小は、災を幸いとし義を忘れ、主は上に荒れ、(9-203p)臣は下を蔽う、奸惡を連結し、鄰好を斷絶し、兵を徴して境を保ち、縦に盗みて國を侵す。蓋し物に定方無く、事に定勢無く、或は利に乗り而して害を受け、或は得るに因り而して更に失う。是を以て吳は齊の境を侵し（左傳に、吳は齊を伐ち、齊の師を艾陵に敗り、遂に晉侯と黃池に會す。越子勾踐は虚に乗りて吳を伐ち、其の太子を獲、遂に吳に入る。

其の後に越は遂に吳を滅ぼす）、遂に句踐之師を得、趙は韓の地を納れ（5卷周の赧王53年より55年にあり）、終に長平之役有り。矧んや乃ち疲民を鞭撻し、徐部を侵軼（突く）し、壘を築きて川を擁ぎ、舟を捨てて利を徼めるをや。是を以て枹を援り磨を乗るの之將、距を抜き（人有りて連座して相把り、地に據りて以て堅しと為す、而るに能く之を抜き取る）石を投げる之（勇力有るをいう）士は、怒りを含んで色を作し、私仇に赴くが如し。彼は營を連らね衆を擁し、山に依りて水に傍い、螳螂（カマキリ）之斧を舉げ、蛄蜥（クソムシ、ダイコクコガネ）之甲（翼が甲の中にあり）被り、窮轍（古語に言う、螳螂は臂を怒らして車轍に当たると）に当たりて以て輪を待ち、積薪に坐し而して燎かるるを候つ。鋒刃暫に交わり、埃塵且に接せんとするに及び、已に戟を亡い戈を棄て、土崩瓦解し、指を舟中に掬し（左傳に、晉の荀林父は楚と戦つて敗れ、軍中に鼓して曰く、先ず濟る者は賞有らんと。中軍は下軍と舟を争い、舟中の指は掬す可きなり）、甲を鼓下に衿び（左傳に、晉は齊を伐ち、齊の師は夜遁れる、晉の師はこれを從い、殿の士の殖綽・郭最等を縛し、衿甲面縛して中軍の太鼓下に坐せしめたり）、同宗も異姓も、縲紲（罪人を縛る黒繩、罪人として捕らわれる事）相い望む。曲直既に殊に、強弱は等しからず、一人を獲而して一國を失い、黃雀を見而して深阱を忘れるは、智者の為さざる所、仁者の向かわざる所なり。誠に既往は之れ逮び難かれども、猶ほ將來は之を追う可し（この二語は以て梁を誘い、再び與に和を講じて以て侯景を離さんと欲する）。侯景は鄙俚之夫を以て、風雲之會に遭い、位は三事に班し、邑は萬家を啟く、身を揣り分を量れば、久しく當に止足すべし。而るに周章（周章狼狽）して向背し、離披（分散して収束する可からざる）して已まず、夫れ豈に徒然ならんや、意は亦た見る可し。彼は乃ち之に授ける之利器を以てし（老子曰く、国の利器は以て人に授ける可からずと）、之に誨えるに慢藏を以

てし（易繫辭傳に曰く、藏を慢にするは盜を誨うと）、其の勢いをして奸を容れるを得、時に便に乗るに堪え使めばなり。今南風の競わざる（左傳に、晉は齊を囲み、楚はその間に乗じて鄭を伐つ。晉人はこれを師曠に聞く。曰く、害あらじ、吾は驤々南風を歌い、又北風を歌うに南風競わずして死聲多し、楚は必ず功無からんと。果たして其の言の如しと）を見、天亡は征有り、老賊の奸謀、將に復た作らんとす矣。然るに堅強を推す者は功為り難く、枯朽を摧く者は力を為し易し。計るに其れ孫、吳の猛將、燕、趙の精兵に非ずと雖も、猶ほ是れ久しく行陳を涉り、曾て軍旅を習い、豈に剽輕之師に同じからんや、危脆之衆に比せず。此を拒ぐには則ち氣を作すこと足らざれども、彼を攻めるには則ち勢いを為すこと餘り有り、終に恐る、尾は身よりも大に、踵は股よりも粗（續は麤）に、倔強にして掉われず、狼戾（欲深く道理にもとる）にして馴し難し。之を呼びて則ち反速かに而して鬻小に、征せざるときは則ち叛遅く、而して禍いは大ならん。（9-204p）かならず應に遙に廷尉を望み（93 卷晉の咸帝成和二年にあり）、肯えて臣と為らず、自ら淮南に據り（黥布の事を用いる、12 卷漢の高帝 11 年にあり）、亦た帝と稱せんと欲す。但だ恐る、楚國は猿を亡い、禍は林木に延き、城門は失火し、（池の水を消火に用いて、池の水は枯れ）殃いは池魚に及ぶ。横しまに江、淮の士子、荆、揚の人物をして、矢石之下に死亡し、霧露之中に夭折せ使む。彼の梁主は、操行聞く無く、輕險は素有り、雀を射て功を論じ、舟を盪して力を稱し、年は既に老い矣、毫又た之に及び、政は散じ民は流れ、禮は崩れ樂は壞れる。加えて以て用捨は方に乖き（周捨を免じ、賀琛を責めて朱异を用いるをいう）、廢立は所を失う（昭明を銜みて、世適孫を建てずして、太子綱を立てる事）、情を矯めて俗を動かし、智を飾りて愚を驚かし、毒螫は懷に満ち、妄りに戒業を敦くし、躁競は胸に盈ち、謬りて清淨を治む。災異は上より降り、怨讟は下に興り、人人は厭苦し、家家は亂を思い、霜を履みて漸有り、堅冰は且に至らんとす（易坤卦初六の爻辭に曰く、霜を履みて堅冰至ると。象傳に曰く、霜を履む堅冰は陰始めて凝るなり。其の道を馴致し堅冰に至るなりと。文言に曰く、臣は其の君を弑し、子は其の君を弑するは、一朝一夕の故に非ず、其の由って来る所の者漸なり。これを辨ずること早く辨ぜざるに由るなりと）。險躁之風俗を傳え、輕薄之子孫に任ず。朋黨の路は開き、兵權は外に在り。必ず將に禍は骨肉に生じ、鬻は腹心に起こり、強弩は城を冲（續は衝）き、長戈は闕を指さんとす。徒らに雀鷖を探るとも、府藏之虚を救う無く（趙の武靈王の事、4 卷周の赧王 20 年にあり）、空しく熊蹯（熊の手のひら、美味）を請う（左傳に、楚の世子商臣は其の父成王を囲む。王は熊蹯を食うて死せんと請う。許さず、乃ち縊る）とも、詎ぞ暑刻之命を延べん。外崩れ中潰えるは、今實に其の時なり。鷸蚌相い持せば（鷸と蚌が相争い漁夫の利を得る、戦国策燕策にあり）、我は其の弊に乗ぜん。方に駿騎をして風を追い、精甲をして日を輝か使め、四七並列し（漢の光武帝は二十八将を用いて天下を定める）、百萬群を為し、轉石之形（孫子曰く、善く人を戦わしむるの勢い、圓石を千仞の山より轉ずるが如き者は勢いなり）を以て、破竹（杜預の言、81 卷晉の武帝太康元年にあり）之勢いと為す。當に鐘山をして江を渡り、青蓋をして洛に入り（79 卷晉の武帝泰始八年にあり）、荆棘をして建業之宮に生じ、麋鹿をして姑蘇之館に游ば使むべし（漢の淮南王安は陰に邪謀有り、伍被は諫めて曰く、昔子胥は吳王を諫める、吳王用いず、乃ち曰く、臣は今麋鹿が姑蘇の台に遊ぶを見んと。今臣は亦た宮中に將に荆棘を生じ、露は衣を霑さんとするを見んと）。但だ恐る、革車之輻輳する所、劍騎之蹂踐する所、杞梓（センダンとアカメガシワ、器物を作る良材）は焉に於いて傾折し、竹箭は此を以て摧殘せられんことを。若し吳之王孫、蜀之公子（晉の左思は東吳の王孫・西蜀の公子を設けて以て三都を賦す）、款を軍門に歸し、命を下吏に委ねれば、當に即ち客卿之秩（李斯は楚より秦に入りて客卿と為る）を受け、特に驃騎之號（孫秀は吳より晉に奔り驃騎將軍と為る）を加えるべし（李弼はこれによりて南人を誘う）。凡百の君子は、勉めて多福を求めるべし。」

其の後梁室の禍敗は、皆な弼の言の如し。

■ 〔侯景は蕭衍に魏主を立てるを勧める〕 侯景は譙城を圍み、下らず。退きて城父を攻め、之を抜く。壬

申（8-0+1=9日）、其の行台左丞の**王偉**等を遣わして建康に詣りて上を説きて曰わしむ、

「鄴中の文武は謀を合わせ、臣を召し共に**高澄**を討たんとす。事は洩れ、(9-205p) **澄**は**元善見**を金墉に幽し、諸々の**元**の六十餘人を殺す。河北の物情は、俱に其の主を念う、請う**元氏**の一人を立てて以て人望に従わん、此くの如くすれば、則ち**陛下**は絶えたるを繼ぐ之名有り、臣**景**は功を立てる之效有り。河之南北は、聖朝之邦（魯の附庸國）、莒（魯の下邑）と為る（小国と為りて以て大国に附く）。國之男女、大梁之臣妾と為らん。」

上は以て然りと為し、乙亥（11-0+1=12日）、下詔して太子の舍人の**元貞**を以て咸陽王と為し、資するに兵力を以てし、北に還り魏に主ならしめ、江を渡るを須ちて、即位を許し、儀衛は乘輿之副を以て之に給す。**貞**は、**樹**（元樹は來奔し、中大通四年に樊子鵠の擒にする所と為る）之子也。

東魏**蕭淵明**は鄴に至り、**東魏**主は閭闔門に升りて俘を受け、讓め而して之を釋し、晉陽に送り、大將軍の**澄**は之を待つこと甚だ厚し。

東魏■**慕容紹宗は侯景に敗れる** **慕容紹宗**は軍を引いて**侯景**を撃ち、**景**の輜重は數千兩、馬は數千匹、士卒は四萬人、退きて渦陽を保つ。**紹宗**の士卒は十萬、旗甲は日に耀き、鼓を鳴らして長驅而して進む。**景**は之に謂わしめて曰く、

「公等は為た客を送らんと欲するや、為た雌雄を定めんと欲する邪？」

紹宗は曰く、

「公と勝負を決せんと欲す。」

遂に風に順いて陳を布く。**景**は壘を閉じ、風の止むを俟ちて（向かい風を避ける）乃ち出でる。**紹宗**は曰く、
「**侯景**は詭計多し、好みて人の背に乗ず。」

之に備えしめ、果たして其の言の如し。**景**は戰士に命じ皆な短甲を被り、短刀を執り、東魏の陳に入り、但だ低視して、人の脛や馬足を斫らしむ。東魏の兵は遂に敗れ、**紹宗**は馬より墜ち、儀同三司の**劉豐生**は傷を被り、顯州（永安中に置く州、汾州六壁城に治し、定戎・建兵・眞君郡を領す。汾州は山西省冀寧道汾陽県、現・呂梁市汾陽市）刺史の**張遵業**は**景**の擒とする所と為る。

東魏■**慕容紹宗は侯景に敗れる** **紹宗**、**豐生**は俱に譙城に奔り、裨將（下級將校）の**斛律光**、**張恃顯**は之を尤め、**紹宗**は曰く、

「吾は戦うこと多し矣、未だ**景**の如く之克ち難き者を見ざる也。君の輩は試みに之を犯せ！」

光等は甲を被りて將に出でんとし、**紹宗**は之を戒めて曰く、

「渦水を渡る勿かれ。」

二人は水北に軍し、**光**は輕騎にして之を射る。**景**は渦水に臨みて**光**に謂って曰く、

「爾は勳を求め而して來たり、我は死を懼れ而して去る。我は、汝之父（斛律金は爾朱・高歡に事える）の友なり、何為れぞ我を射るや？汝は豈に自ら水を渡りて南せざるを解せんや？**慕容紹宗**は汝に教えし也！」

光は以て應える無し。**景**は其の徒の**田遷**をして**光**の馬を射しめ、胸を洞す。**光**は馬を易えて樹に隠れ、又た之に中て、退きて軍に入る。**景**は**恃顯**を擒とし、既に而して之を捨てる。**光**は走りて譙城に入り、**紹宗**は曰く、

「今定めて何如や、而るに我を尤める也！」

光は、**金**之子也。開府儀同三司の**段韶**は渦を夾み而して軍し、潜に上風に於いて火を縦ち、**景**は騎を師いて水に入り、出で而して卻き走る、草は濕り、火は復た然えず。（胡三省曰く、斛律光の勇も利あらずと雖も、段韶の智も遅しとするを獲ずと雖も、然れども東魏の志気未だ衰えざるなり。故に慕容紹宗は機に乗じて其の巧みを運らし以て功を為すを得た

り。史を觀る者は若しただ一時の勝負を以て人を論じるは、識略有る者に非ざるなりと)

●魏の岐州は久しく喪亂を經，刺史の鄭穆は初めて到り，戸三千有り，穆、撫循は安集し，數年之間に，四萬餘戸に至り，考績は諸州之最と為る。丞相の泰は穆を擢んでて京兆尹と為す。(9-206p)

■東魏侯景は東魏の慕容紹宗と相い持つこと數月，景の食は盡き，司馬世雲は紹宗に降る。(ここに至りて侯景の敗勢強まる)

令和 5 年 3 月 8 日 7332 文字

令和 5 年 3 月 18 日 16866 文字